

伊丹市主催

アイホール ダンスコレクション2



# 海をひたしおぼくもひたしこる

神蔵香保ソロダンス公演

期日	4月20日(金) 21日(土)	22日(日)
開場	6:30P.M.	1:30P.M.
開演	7:00P.M.	2:00P.M.
入場料	2,800円 (前売り)	2,500円
会場	AI・HALL (伊丹市立演劇ホール) 0727-82-2000	



JR: 伊丹駅前(大阪駅から宝塚線で15分)  
 阪急: 伊丹駅から東へ徒歩7分  
 (神戸線塚口駅でのりかえて3駅目)

- 問合せ 06-315-6159 有限会社 **ヴィレッヂ**
- 前売り券扱い チケットぴあ 06-363-9999 チケットセゾン 06-308-9999 プレイガイド21 06-251-9999

人間はものを創りだす存在だと知ったのが最初の閃きです。閃きはこどものころ読んだ一冊の童謡集から授かりました。内気だったことも、美しい挿絵のあるその本に夢中になり、じぶんをとりまいてる現実がそれまでとはべつの彩度で輝いていることに気づきました。その時、わたしはページのなかに作者という見えない存在を見たのだと思います。歌と絵は、草と木とおなじように最初から存在していたのではなく、人間がそれを創り出したのだという発見に心を撃たれました。

わたしは踊ることで外界とつながっています。踊ることはわたしには生きることとおなじです。心のおくのかつそりとした場所に降りていくこの行為をもたなかつたら、わたしは不安と絶望をだいて万象のなかをさまよっていたのかもしれない。わたしたちが暮らしている日常はあまりにメカニックで、何かのシュミレーションゲームのようです。実際に経験しなくてもあらゆることを知ることができます。人間の存在さえも合理的なものとして成立させてしまうようなこの状況のなかでわたしに必要だったのは、汗をかき息を弾ませ、からだをつかう体験でした。心のなかのものをからだに響かせ、無意識のうちにからだが目についた動きをひとつひとつ体験しなおすことで、じぶんのなかのからだのつながりを確かめ、回復しようとしたのだと思います。からだは響きあい分かちがたいということ、あらためて学ばなければならなかつたわたしは、現代という時代のなかで病んでいたのかもしれない。

こんな時間のなかで不意にもうひとつの体験とてあの瞬間があります。それは、いいあらわしがたい全体的な体験で、肌触りや、匂いや、味覚や、音が、ひとつになってわたしを包み、ガラスの曇りが消えるよう



にわたしの存在を透明にしていきました。そんなときわたしは、ここにいるのに、ここにいないようなのです。わたしは、他者や、草木や、風や、光のなかにいます。喜びも哀しみもひとつになったような感覚に満たされて、じぶんがじぶんであると同時にじぶんではなく、何かに操られて踊っているように感じます。その見えないうちは、からだの中の、心の中の、さらに奥まったところに深く静かに息づいています。それは、地下を水脈が貫くように、個を超えて、すべてのなかを流れているたましいといったらいいのかもしれない。透明な浮遊感と重なるこの時間は、わたしに人間が祝福された存在であることを思いださせてくれます。それは同時に、自分自身の存在の微少さや、あやうさを、改めて認識しなくてはならない時間でもあるのです。踊りのなかでからだが見せる様々な動きは、心の表情のあらわれです。わたしは、心に動きがなかつたら腕ひとつ上げることができないほど、無力で小さいのです。けれども、からだを澄ませてそこに心を共鳴させることができれば、限りなく大きくなれる可能性も人間は与えられていると思います。わたしは、自分のダンスにドラマ性やスペクタクル性の花を活けようとは思いません。さりげない空間にからだひとつを置いて、表現というものを超えて、ただ存在し、漂っているようなダンスを踊りたいと考えています。からだと心とたましいをダンスのなかに統合し蘇生させたいのです。そうすることによって、人間の内に秘められているものが、すこしずつ目の前に開かれていくような予感がわたしにはあります。ことばにはロジカルな力が強すぎます。ことばにすることで凍えて固くなってしまうものがわたしたちの内奥には無数にあります。その内奥をダンスに託したいのです。